

林真理子とフェミニズム

一 女性嫌悪の女性作家

作家・林真理子の小説世界がミソジニー（女性嫌悪）の色濃いものであることはよく知られている。

本論は八〇年代という「女の自立」「女の時代」ブームに沸く時代にデビューした林真理子とフェミニズムとの距離を探る試みである。

マスメディアによって「女の時代」と謳われた八〇年代とは、一方で女性をめぐる矛盾に満ちた時代であった。「女の自立」ファンタジーを煽るメディアとはうらはらに、実際には、女性は仕事か家庭かの二律背反を迫られた。その時代にあって、林は一貫して仕事を持つ女性の立場でものを書き続けた。八〇年代の彼女のエッセイは「フェミニズムのようなもの」（奇宮和子、二〇〇四・一一・一六）を表現していた。しかしながら、林の紡ぎ出す物語の女性への視線には、確かに女性嫌悪が感じられる。男性社会で闘い、抱えてきた孤独な思いを林自身はどのように昇華させてきたのであろうか。

以下の順で議論を行う。最初に、上野千鶴子、小倉知加子という現代日本を代表するフェミニストたちの「林真理子論」を紹介する。彼女たちは九〇年代になって林の書くものに女性嫌悪の臭いが濃くなったことを指摘し、林の変節を批判する。林はミソジニー（女性嫌悪）

北出 真紀恵

作家なのだろうか（第二節）。次に、ミソジニーという概念に焦点をあて、ミソジニーをめぐる装置について確認してみたい。ミソジニー、ホモフォビア（あるいはヘテロセクシュアル）、ホモソーシャリティ（男同士の絆）について、イヴ・セジュウィックが提出した理論構成を整理する（第三節）。その上で、林の近作である『私のこと、好きだった？』に依拠しつつ、男性社会のなかの「女」というカテゴリーと、もう若くはない女との距離を示してみたい（第四節）。

最後に、林真理子のミソジニーとはどのようなものか。林は女性を嫌悪の対象にしているのか。林とフェミニズムの距離はいかようなものであるかを考察する（第五節）。

二 フェミニストたちと林真理子

林真理子の小説は、「現代の女性の欲望と本音を描いた」ことで評価される。林作品の特質について、菅聡子はそれを「客観的な批評性」（菅、一九九七・四五二―四五三）であるとし、斎藤美奈子は「登場人物の欲望や怨念や復讐心や優越感といった『負の感情』が暴露される点にある」（斎藤、二〇〇二・一四〇）と述べた。また、複数の登場人物の視点で語られる物語は、立体的で重層的な構成（菅、一九九七・四五三）でもある。そして、林の物語の構成手法はデビューから

現在まで基本的には変わっていない。

現代の東京を舞台にした恋愛小説においても、歴史小説においても林作品の女主人公たちは、「男に愛されたい」「世俗的な成功もしたい」ともがく。そうした欲望とともに、女と男との微妙な感情のずれや、女と女の間に生まれる嫉妬や小さな憎悪が細やかに描かれる。綿密な取材に基づいたリアルなディテール描写も林の特徴であろう。読者は、言葉にできないまま密やかに心の奥底にしまっておいた感情を思い起こさずにいられない。そして、それらの感情は、現代社会に生きる女性ならば必ず思い当たるものである。林が多くの読者を獲得しているのはそうした「負の感情」の表現力に長けているからであろう。

「女の時代」のトップランナーであった林は、デビュー以来、男性社会に進出し始めた若い女性たちの仕事や恋愛の葛藤を書き続けてきた。昔は「彼女の作品には若い女性の内面に寄り添いつつ語る時に生じがちなナルシズム臭はほとんど感じられない。」(菅、一九九七・四五三)と林の「客観的な批評性」を評価したが、皮肉なことに、フェミニストたちが批判したのはまさに林のその「立ち位置」であった。

上野千鶴子は「女への悪意に満ちた林の視線を『免責』するものがあれば、それは林が『競争』から降りていること、女の『例外』であるという立ち位置による」という。上野の理屈は以下の通りである。

「女と女の競争とは『男に選ばれる』女の帰属を争うものであり、競争相手のナルシズムを女は決して許さない」。「林は女としてのナルシズムを欠いており、競争相手が蹴落とされてもその指定席に自分が入れ替わる可能性はないのであり、それが批判者である林に安全圏を与えている」のだと。そして上野は、それは林の「現実の反映ではなく、周到に選んだ戦略」であると断りつつも、「例外」の立場に自分を置く事で、「ついに相手を凌駕することのない者がもつ、無害ではないが脅威とはならない感情である『ひがみ』を安全に商品化している」のだと指摘する。上野によれば、林の立ち位置とは「女の例外」

であるというアイデンティフィケーションによる「安全圏」である。

(上野、二〇一〇・二二五―二三八)

また、上野は、林が美しく魅力的な主人公たちの、つまり「女を武器にした女たち」の、卑劣さ卑小性を描くのが実にうまい」と評価しているが、「女主人公の破滅を描く容赦のない筆致は、自分が『例外』であるからこそ持てる特権的な外部の目から意地の悪い観察が行われている」と述べる。林にとって女性嫌悪は「自分以外の女」に向けられたものであり、大衆作家の「成功」は「自分の容姿に不満や不安を持っている」多くの女たちの「俗情との結託」にあるのであって、林の「例外」の位置に立つという戦略は、「ミソジニーを生む家父長制を再生産し、強化する側に回る」と、上野は批判する。(上野、二〇一〇・二二五―二三八)

林と上野との関わりでまず思い出されるのは、いわゆる「アグネス論争」であろう。上野によって強引に「子連れ出勤論争」にすり替えられ、フェミニストたちがほとんどみなアグネス派に与して終結したこの論争をめぐって、小倉知加子は、次のように述べている。

林真理子は、この『事件』に遭遇することでフェミニストたちに

にずいぶん傷つけられたであろう。ひょっとすると彼女は、最初にアグネスを批判したとき、フェミニズムとかいう思想が自分に味方してくれると思っていたかもしれないのだ。しかし、フェミニストはそうしなかった。それは、一に上野千鶴子の強引な論点のすり替えによっている。(中略)前線を飛び出した斥候兵を友軍が後ろから撃ち殺したような後味の悪さが残る。

(小倉、一九九一・二〇五・五七―六九)

小倉はまた、当時の論争のなかで、「林のアグネス批判のなかには論理の形をとりきれない健康な理性の姿があり、アンチ林を標榜した

フェミニズムの言説のなかに、論理の鎧をかぶった貧血ぎみの感性を「みて、林が男性社会のなかで闘ってきた孤独な思いを受け止めずにいていいものだろうか、と問うてもいい。(小倉、一九九一―二〇〇五・五八)」

「ちょっと待ってよ、アグネス」と林がアグネスの子連れ出勤に対して異を唱えたことに端を発したこの論争は、上野の参入を機に多くのフェミニストたちがなだれこんだ。そして彼女たちはこれを「働く女性と子育ての関係」、今でいう「ワーク・ライフ・バランス」をめぐる論争として位置づけ、「仕事」「家庭」また、女性役割とは何かという諸点を含みこんで八〇年代の女性の状況を象徴する論争へと展開させていったのであった。小倉はこの論争を振り返り、林はただ「男性向けマスコミが元アイドル歌手に揉み手をして擦り寄っていくさまを批判しただけ」だったのだと解釈する(小倉、一九九一)。また斎藤も、林がアグネスへの批判に向かったのは「男に好かれるカワイイ子だけが得するのは不公平ではないか」というシンブルな発想であったという。(斎藤、二〇〇二―二〇〇六・一四八)

「アグネスの子連れ出勤」をめぐって、林が力点を置いたのは「アグネス」のふるまいであり、フェミニストたちが反応したのは「子連れ出勤」をめぐる問題であった。

くだんのアグネス論争においては、「知識層に属するフェミニストたち」の「論理の鎧をかぶった貧血気味の感性」(小倉、一九九一―二〇〇五・五八)では林の言説から大衆的かつ健康な理性を掘り取る事ができなかったのである³⁾。

一方で小倉も、アグネス論争を経た九〇年代以降の林に、女性嫌悪の色が濃くなったことを指摘している。デビュー当時の林には「男社会の不正への憤りと豊かな活力、健康な欲望、頭の良さ、そして気持ちのいい性質がすべてあつた」が、フェミニストたちの仕打ちによって女性憎悪の作家になってしまったと「暗澹たる思い」を述べている。

(小倉、一九九一―二〇〇五・五七―六九)

小倉の言うように、林真理子の変節の原因がアグネス論争にあったかどうかは不明であるが、林作品が一貫して「女性たちの欲望と本音」といった「負の感情」であふれ、そうした女性たちへの「批評性」に満ちた女性嫌悪の色濃いものであることは紛れもない事実である。

三 ミソジニー、ホモフォビア、ホモソーシャル

本節ではミソジニーという概念についての説明を行ってきたい。ミソジニーは「女性嫌悪」と訳される。それは「女性蔑視」でもある。「女性嫌悪で女好き」は一見矛盾しているように見えるが、「女性蔑視で女好き」は成立する。実際、そうした男性は多く存在する。

そしてこのミソジニーは、近代における性別二元制のジェンダー秩序を機能させる核である。

男たちの社会的連帯(ホモソーシャルティ)がミソジニーとホモフォビア(同性愛嫌悪)によってかろうじて成り立っているというメカニズムを鮮やかに説明したのはイヴ・セジュウィック(一九八五―二〇〇一)であった。

セジュウィックは、同性愛を意味するホモセクシャルと区別し、性的ではない「男同士の絆」をホモソーシャルという概念で説明した。より正確にいうならばホモソーシャルティとは「性的であることを抑圧した男同士の絆」のことである。

セジュウィックの問いは、父権制下における男性は、いかに集団としての絆を強固にするのか、あるいはまた体制を脅かしかねない存在であるはずの女性を、いかに男性中心の制度に回収するのか、というものであった。(上原、二〇〇一・三三五)

セジュウィックはまず、婚姻つまりレヴィ・ストロースがいうところの「女性の交換」とは、女性を男性の形式的なパートナーとして父権

制度内に取り込みつつ、実際は取引（交換）の客体として周縁化するものであり、ジェンダーの非対称性を固定する装置であることを説明する。ホモソーシャリティとはミソジニー（女性嫌悪）に基づくものであるが、それは潜在的にホモエロティック（同性愛）と連続している。だからこそ異性愛主義の原動力として男性のホモフォビア（同性愛嫌悪）があるのだとセジュウィックは述べる。男たちはこの同性愛的なるものを隠蔽するために異性愛の確認（女性の交換）をするのだという。つまり、女性の交換は、ホモフォビアに囚われた男性にとって、女性を周縁化するだけでなく、異性愛者としての主体を立ち上げつつ、ホモソーシャルな体制に参入する通過儀礼ともなる。ホモソーシャルな連帯とは性的主体同士の連帯である。ホモソーシャリティは、ホモフォビアによって維持され、ホモソーシャリティに属する男性が自分の性的主体性を確認するためのしかけとして、女性を性的客体にすることが使われる。つまり、女性を性的客体とすることを互いに承認しあうことによって、性的主体間の相互承認と連帯が成立する。女性を（最低ひとは）「モノにする（所有する）」ことが、性的主体であることの条件である。男性が「結婚して一人前」として社会的に認知されることを思いおこせばよい。こうした、女性を自分たちと同等の性的主体とは決して認めない、女性の客体化・他者化、女性蔑視のことをミソジニーと呼ぶ。

上野はセジュウィックの理論構成を平明なことばで次のように説明している。「男と認めあつた者たちの連帯は、男になりそこねた者と女とを排除し、差別することで成り立っている。」そして、このことは、男であることがいかに脆弱な基盤の上に成り立っているのか証明することでもある。（上野、一〇一〇：二二二～二二三）

ホモソーシャリティは、ミソジニーによって成り立ち、ホモフォビアによって維持される。ミソジニーでありながら「女好き」という男性たちが大量に出現すること、なぜ男性たちが自分より劣った女性に

欲望するかが理解されよう。

セジュウィックが暴いてみせたのは、男性を「男にする」のは、他の男性たちであり、男性が「男になった」のを承認するもの他の男性たちであって、女性を「女」にするのは男性であり、「女になった」ことを証明するのは男性であるという、圧倒的にジェンダー非対称なメカニズムであった。

男性にとってのヘテロセクシュアル（異性愛）の秩序とは、男性が性的主体であることを証明するための装置であり、この異性愛装置のもとでは、男性と女性是对等な対にはなりえない。異性愛秩序とは男性は同性を性的対象にしてはならず、男性ではない者を欲望の対象にしなければならぬ。異性愛秩序のもとでは、「女」とは定義上、男性の性的客体・性的欲望の対象に他ならないのであって、男性の性的欲望を喚起しない女性は、定義上「女ではない」ことになる。

異性愛の装置は女性にとっては畏である。それはミソジニーとともにホモソーシャリティを維持するためのホモフォビアのいいかえにすぎないからだ。

上野は、ミソジニーは男女にとって「女性蔑視」「自己嫌悪」として非対称に働くと述べ、女性が自らのミソジニーを超える道筋については次のように述べている。「このミソジニーに満ちた社会で生まれて育ってミソジニーを身につけていない女性はまずいない」のであって、その意味で「フェミニストとはみずからのミソジニーを自覚してそれと闘おうとしている者」のことである。「多くの女性は、ミソジニーとは何かを知っているからこそ、それに対して怒りと苦痛を覚えてきたのだ」と。（上野、一〇一〇：二五七～二七三）

男性の性的欲望を喚起しない女性は「女」というカテゴリーから逸脱する。私たちの社会では「若く」なくなった（男性の欲望を喚起しなくなったとされる）女性や、「結婚していない」（男性に選ばれない）女性に対するまなざしは厳しい。このことは、私たちが生きる社会が

いかにホモソーシャルでミソジニーなものであるかを教えてくれる。

四 “女” というカテゴリー

本節では、林真理子『私のこと、好きだった?』(二〇〇九)に依拠しつつ、男性社会つまりホモソーシャルな世界における“女”というカテゴリーについて考えてみたい。

題材とする作品の主人公・美季子は東京のとあるテレビ局につとめる四二歳の女性アナウンサー。もう「若く」なく、「独身の」女性である。小説の主題は中年期の恋愛にあるのだが、本論ではこの主人公の職業が「アナウンサー」に設定されていることに注目したい。特に女性アナウンサーという職業は、九〇年代に入った頃に始まる「女子アナ」ブームに象徴されるように、メディア有名人としてわが国独自の展開を見せた。「女性アナウンサー」ではなく「女子アナ」の「女子」とは「未婚、若い女性」の含意がある。「女子アナ」は、女性特有にみられる現象であり、この点からいっても「女子アナ」たちは性的客体として消費されているのであり、現代の社会がいかにホモソーシャルなものであるかは推し量る事ができよう。職業人でありながらも、常に「若さ」と「女性性」が消費される立場にある女性アナウンサーにとって、「若さ」が失われたとき、その世界はいかなるものとなるのか。また、ホモソーシャルでミソジニーな社会のなかで、女性は加齢とどのように向き合っているのか。以下、読み解いていくことにしたい。

会社のトップたちが、これほどまで女性の好みをうんぬんする会社があるだろうか。まるでキャバクラの女性を選ぶように、私たちの手から手へ、履歴書の写真が渡されるのを美季子は知って

いる。

そして当然のことながら、自分はひややかにそうしたアナウンサー室を眺めている。もう美季子は渦の中に入ってはいない。渦を静かに眺め、密かに批判することは、人が考えるほど淋しくはなかった。もうこのことは無縁なのだと考えているわけではなかった。自分が高いところにいると傲慢な気持ちになっているわけでもなかった。

ただここにいままでいいのだろうかと思う。自分は立ち去る機会を失くしてしまった。それが少々口惜しい。それだけのことだ。(林、前掲書：六七―六八)

テレビ局のアナウンサーとして採用が決まったときは、出身高校から講演を頼まれ、かつては報道番組のキャスターも数年つとめた。美季子のライフコースは選ばれた人間のものであり、恵まれたものであった。ただ、気がつけば、二十年という年月がたっていた。

結婚をしていれば事態は違っていただろうと思う。プロ野球選手や芸能人、といった高収入の男でなくても、同じ職場で働く男でよかった。夫の収入という保証があれば、自分はそう迷うことなくフリーになったはずだ。そうして安定と平穩の中で、よく吟味した仕事をし、子どもを産み育て、女性誌にエッセイのひとつも連載したりする。

この数年、そんな女性アナウンサーたちが増えた。自分よりもはるかに頭のいい勇気のある女たちだ。美季子が出来なかったことを軽々とやってのけ、そして家庭の幸福をも手にしているのである。(林、前掲書：二八―二九)

アナウンサーの、特に女性アナウンサーのエンプロイアビリティ

(雇用されうる能力)の強迫は苛烈である。専門職としての技能であるアナウンスの技術以外のものが求められる。そして、「若さ」のある時代は「渦」の中に巻き込まれる。美季子もかつては「渦」の中にいた。

「頭のいい」女性たちには「渦」が見える。自分をとりまく「渦」が永遠に続かないことも知っている。「渦」とはホモソーシャルでミソジニーなまなざしが最も先鋭化した空間に他ならない。「渦」は女性同士の競争も呼び起こす。そのような競争から降りて、安全圏にのんびりと座するためには、「男性に選ばれる」こと、つまり結婚以外にはない。そして、「要領のいい」女性たちは、変わるはずのない堅牢なホモソーシャルな体制に決して抗おうとはしない。

女性たちの社会進出は八〇年代後半から本格化した。しかし、それは女性たちを結婚市場だけでなく、労働市場においても選ばれる客体になることを強いることになった。いうまでもなく選ぶのは男性たちである。女性アナウンサーたちは職業人であると同時に性的対象としても値踏みされ、それがダイレクトに職業人としての評価(人気)に跳ね返ってくる。

女性アナウンサーという取材対象が、レギュラー番組の多寡のみならず、プライベートな恋愛もが男性週刊誌をにぎわせる背景は、ホモソーシャルティのミソジニー以外の何ものでもない。

アナウンサーとしての自分は、ほとんど仕事がなくなっている。能力が劣ったわけではない。ただ年をとっただけだ。話す技術は以前よりも上がっているはずだが、容姿が衰えてきたということだけで、テレビからは排除されようとしている。が、若く美しいれどもやはりテレビから除け者にされようとしている女もいる。こちらにも能力がないわけではない。運が悪いだけだ。

テレビ局というところは、いやアナウンサーというのはなんと

林真理子とフェミニズム

不思議な職業なのだろう。会社員でありながら、これほど容姿や運によって左右される仕事があるだろうか。が、この二つから見放された自分はとても気楽だと美季子は思う。(林、前掲書・五三)

年をとり、容姿が衰えることで、「渦」は遠ざかる。「女」というカテゴリーからドロップアウトすることで男性たちによる「女」としての値踏みから逃れることになる。そこにある感情は「ねたみ」「そねみ」でも「ひがみ」でもない。美季子は意図せず「例外」の位置に置かれたことでミソジニーから逃れることが出来た。女性作家は女主人公にそのことを「気楽」だと言わせている。ミソジニーと距離を置こうとする「客観的な批評性」(菅、一九九七)がここにある。

一方で、林は女主人公のプライベートな恋愛を描く事も忘れない。美季子の二〇代、三〇代の恋愛を詳細に書きこんだうえで、四〇代の現在の恋愛も描く。それは恋愛と呼ぶにはあまりにもドライな関係である。既婚の男性との恋愛は結婚を求めるわけではない。精神的な結びつきを求めるといったロマンチックなものでもなく、それは情事と呼ぶにふさわしい。

「男を受け入れたのではない。メールや電話、そして面と向かって口にされる口説き文句を受け入れていたら、つい男とそういうことになっていた」(林、前掲書・一三三)のである。それは「長く続きそうな情事」であるゆえ、「マナーとして愛し合うふりをすることもある」(林、前掲書・一二五)関係である。

未だかつて、こんな風に簡単に恋が終わったことがあるだろうか。男は未練のふりも見せない。執着のかけらもないのだ。これほどくだらない恋でも、もしかすると自分にとって最後の恋かもしれない。もう自分は四十過ぎて、男から愛されることなど

ないかもしれないのだ。これからずっとひとり生きていくかもしれない。それなのに最後の男から、こんな風にあっさりと別れを告げられたのだ。(中略)

じゃあ車が来たからと携帯が切られた。美季子はひとり残される。口惜しさで悲しみでしばらく呼吸ができない。男が去っていったからではなかった。初めて男に媚びる演技をした。そのことがつらい。もう自分は若くないのだと、どうして自分で確かめることをしたのだろう。(林、前掲書・一六四)

ここで描かれる美季子の動揺は、自らのミソジニーとの格闘である。ホモソーシャルティの中で女性性は性的客体になれることで初めて、「女」としてカテゴリー化され、その世界への参加を許される。美季子は「初めて男性に媚びる演技をした」。それは、女性のなかにあるミソジニーである。美季子は自分のなかにあるミソジニーを自覚し、そしてそれを憎む。もう「若くない」性的客体は、男性たちにとって「未練」や「執着」を生み出しはしないという現実を、そして、今後の人生において、男性から性的客体になれることはないかもしれないという不安とともにつきつけられるのだ。性的客体になれることを忌避するのではなく、性的客体になれることから外れることを恐れてしまう。美季子のそれは、美季子が異性愛秩序のジェンダーに囚われていることの証しである。当の美季子こそ、このような男性に未練もなければ執着のかけらもないのに、美季子は「女」というカテゴリーではなくること、秩序からの逸脱が恐いのだ。

林がデビュー以来、描き続けてきたことのひとつに女性にとっても性愛に愛情などといったものは必要ないという事実がある。「愛のないセックス」が男性にとっては許され、女性にとっては許されないという性のダブルスタンダードが、実は女性にとっても有効性のないことを、女性登場人物に実践させることによって描いてきた。林が暴い

てみせるのは性と愛が一致するという近代のロマンチック・ラブの神話性である。

斎藤は林を「ウーマンリブの落とし子」と評したが、ウーマンリブという思想運動が「男女平等」ではなく、「性の解放」と「個人の解放」、つまり、女性のセクシュアリティを問題にしたことと個人の解放にこだわったことを思い起こすならば、林真理子は間違いなくウーマンリブの系譜にある。(斎藤、二〇〇二＝二〇〇六・一一一―一五二)

「現代女性の欲望を書いた」林が男性社会から反発を買ったように、セクシュアリティというもつとも個人的な部分を含んだ女性解放運動も男性社会から激しい反発を買った。ホモソーシャルティは、女性が性的主体になることを決して許しはしないからだ。

ところで、林作品の構成上の特徴のひとつに「複数の視点」がある。章ごとに交互に移動する三人称視点の語りという手法は、「双方の視点が示されることで両者の徹底した乖離と理解不可能性が浮かび上がる構図」(鈴木、二〇一〇)となる。この物語における美季子の語りの相方は、大学時代の友人・兼一である。兼一は美季子の友人でもあるが親友・美里の夫でもあった。兼一の不倫が原因で二人は離婚する。そして、美里の死後、「女を誰ひとり幸せにしてやれない」兼一は心を病んでいく。

「函館で気づいたんだよ。俺にとって美季子がどんなに大切な人かが。その前からだっけと気づいてた。だけどもわからないけど、美季子はオレの人生とはかわりを持つことなく生きていく女だと思ってた。遠い、ていうんじゃない。なんていうか、美季子は颯爽とひとり生きている女で、俺が恋したり、愛したりするのは違うと思ってた。美季子を手に入れるのは、男の親友としてだと思ってたんだよ……」。

「俺が美季子を選ばなかったんじゃない。美季子を選ばせないようにしたんだ。」(林、前掲書…二八七)

美季子の「徹底した乖離と理解不可能性」の相手として林が設定したのは兼一である。美季子は若い頃から兼一を好きであった。美里の死後、二人で函館に旅し、関係を持った。しかし、美季子にとって、それは、傷ついた兼一をただ受け止めてやったにすぎない。相手を救いたい、幸せにしてやりたいという一心であったのだ。兼一との性愛で描かれたのは美季子の性的主体性である。一方の兼一は、客体になりえない美季子のことを「選ばせないようにした」という。美季子はそのことに無自覚であるが、女性作家の視点は両者の理解不可能性を露にする。

若かりし日の恋の成就などという陳腐なドラマのようなハッピーエンドを林は用意しない。物語の終盤で美季子は結婚するが、エリート医師との結婚ではやく周囲の反応との乖離や、ダウン症の子どもを産むことに反対する夫との不和、兼一との絶望的な理解不可能性が描かれていく。一見、ホモソーシャルティに与し、「要領の良い」人生を送っているかのように見える自分と「要領の悪い」自分との乖離、ミソジニーなものと理解不可能性は美季子にとって絶望的でさえある。「自分は本当のことを告げてはいない」と美季子は思う。

タイトルの「私のこと、好きだった？」は美季子が兼一に寄せた手紙の結語である。兼一への手紙は、葛藤をかかえつつそれらと共に生きていくことの、正解とされるシナリオを書き換えていくという決意表明でもあった。

最後は、美季子の一人称である。

しんどいけど、私はうんこらしよって、ひと頑張りしてこの宿題をするつもりよ。大学を卒業して以来のレポートを、ちゃんと

林真理子とフェミニズム

書き上げていこうと思ってる。苦しんだ者たちだけが書き上げるこのレポートをちゃんと提出して、他の人には出来ないことをしたよと、私は胸を張って死んでいこう。でもそれは今じゃない。何十年後の話だよ。

そうレポートの途中だけど、このことは聞いておきたい。ケンちゃん、私のこと、好きだった？私はむちゃくちゃ好きだったよ。(林、前掲書…三五四―三五五)

林が描写したのは、女主人公に向けられたミソジニー(女性嫌悪)ではなく、「女」というカテゴリーの境界線上にいる女主人公に向けられるホモソーシャルティからのミソジニーである。そして、主人公の自らのミソジニーとの格闘である。

上野による林のミソジニー批判は、林の「例外」戦略にあったが(上野、二〇一〇…二二五―二三八)、鈴木はそれに対して「林のミソジニーは『自分以外の女』に向けたものというよりは『女性性』を捨てて勝負すべき場にそれを持ち込む『無神経』に対して向けられたものといったほうがよい」(鈴木、二〇一〇)と疑義をはさんでいる。鈴木が述べるように、林の憤りとは、無自覚かつ無神経にミソジニー体制に与する女性に対して向けられたものであり、また、林の怒りとはその背景にあるホモソーシャルティのミソジニーに対して向けられたものである。林のその姿勢はデビュー以来、一貫しているのではない。その証しに、自らの「女性性」で利益を得ようとする女性への女性嫌悪は辛辣であるが、ミソジニーに対して自覚的かつ格闘を続ける女性への林の視線には、確かな共感が見える。

五 林真理子のフェミニズム―要領の悪い女性たちとのつながり

小倉は男性社会に対して林真理子がとらざるをえなかった戦略について次のように説明している。

男性社会に対処する方法は、古典的なフェミニストのように男性社会に抗議するか、大多数の普通の女性のように泣き寝入りするかのどちらかである。「林真理子は古典的フェミニストの方法をとるには余りに羞恥心に敏感であったし、諦めて泣き寝入りをするには余りに倨傲な自負心を持ち合わせていた。だから、彼女に残された方法は第三の方法しかなかった。それは、制度がかくも不正なものなら、共同正犯としてその制度にかかわってやり、シナリオを書き換えてやると空想することである。」(小倉、一九九一―二〇〇五・六三―六四)

林の第三の方法とは、女性にとっては不正なホモソーシャリティという制度に自らかかわり、「シナリオを書き換えてやる」と空想することであった。

世の中には「要領がよくて男に媚びる女」と、「要領が悪くて男に媚びることのできない女」の二種類の女性がいる。

実際、「若く」「美しい」ことを利用される女性や「若く」「美しい」ことを自覚してそれを利用する女性、ミソジニー、ホモフォビア(あるいはヘテロセクシュアル)が支えるホモソーシャリティに都合良く適応できる「要領のいい」女性たちがいる一方で、その体制に与することが出来ない、あるいははからずも逸脱してしまった「要領の悪い」女性たちがいかに多いことであろうか。また、一見ホモソーシャリティに与しているようにみえるものの、その実、その体制に違和感を覚えながら生きる「要領の悪い」女性たちがどれほど多いことであろうか。林が辛辣な視線を向けてきたのは「要領のいい」女性たちにてあって、憎悪したのはその背後に控えるホモソーシャリティである。

林の第三の戦略は、「共同正犯となってその制度にかかわってやり、シナリオを書き換えてやると空想すること」(小倉、一九九一―二〇〇五・六三―六四)であった。残念ながら、そのシナリオは大筋では

いまだに実効性を保っている。しかし、ほんの少しではあるが、微調整を必要としてきており、私たちの社会は、その内部から近代のあらゆる体制を揺るがせつつある。

ホモソーシャルでミソジニーな社会の女性たちは、無自覚なままその体制にのみこまれる。甘美な恋愛が畏であるなどだが最初から想像できよう。女性たちはその体制のなかで覚醒し、格闘する。そのやりかたは人それぞれだ。躓き、傷つきながらも、主体的に生きることを選択しようとする力が、フェミニズムの実践ではあるまいか。林とフェミニズムとの距離は遠いようで近い。

「要領の悪い」女たちとのつながりを、林は忘れてはいない。

林真理子が紡ぎ出す物語世界には「フェミニズム」がある。

参考文献

アグネス論争を愉しむ会編(一九九八)『アグネス論争』を読む』宝島社。

江原由美子(一九九〇)『フェミニズム論争』勁草書房。

Eve K Sedgwick. (1985) *English Literature and Male Homosexual Desire*. Columbia University Press. 上原早苗・亀澤美幸訳『男同志の絆―イギリス文学とホモソーシャルな欲望』(二〇〇一)名古屋大学出版会。

林真理子(一九九六)『不機嫌な果実』文藝春秋。

(二〇〇九)『私のこと、好きだった?』光文社。

林真理子・上野千鶴子(二〇〇一)『マリコのここまで聞いていいかな 林さん、もう「アグネス論争」では寝返ってもいいんじゃない?』『週刊朝日』二〇〇一年三月二日号。

奇宮和子(二〇〇四)『なぜフェミニズムは没落したのか』中公新書ラクレ。

管聡子(一九九七)『作家ガイド 林真理子』『女性作家シリーズ20』。

妙木忍(二〇〇九)『女性同志の争いはなぜ起こるのか 主婦論争の誕生と終焉』青土社。

小倉知加子(一九九二)「林真理子論 長距離ランナーの栄光と孤独」『月Asahi』一九九一年三月号→(二〇〇五)『シュレーディンガーの猫 パラドックスを生きる』いそっぷ社所収。

斎藤美奈子(二〇〇二)『文壇アイドル論』岩波書店→(二〇〇六)文春文庫。

鈴木直子(二〇一〇)『短大』イメージの形成と一九八〇年代の林真理子『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報Vol.17』。

上野千鶴子(二〇一〇)『女嫌いーニッポンのミソジニー』紀伊國屋書店。

註

(1)一九八六年、男女雇用機会均等法が成立・施行され、女性の社会進出を可能にはしたが、当時の女性の社会進出とは、仕事と家庭の両立支援策のないまま、「男並み」に働けという厳しいものであり、第三号被保険者枠や配偶者特別控除枠など、相次いで専業主婦優遇政策がとられた。

(2)アグネス論争の概要については、アグネス論争を愉しむ会編(一九九八)、江原由美子(一九九〇)、妙木忍(二〇〇九)などに詳しい。

(3)斎藤美奈子(二〇〇二)はこの背景にフェミニズムを支える階層性に注目している。八〇年代末期からフェミニズムが急激に大衆性を失い、学問としての精度をあげていき「インテリの思想」となっていた。フェミニズムの側が女の中に知識人と大衆という二つの層を作り出してしまったのではないかと問うている。いうまでもないが林は一貫して「大衆」の欲望を言語化してきた作家である。

(4)人類学者レヴィストロースは、親族構造において婚姻とはひと

りの男とひとりの女との間に成立するものではなく、男性からなるふたつの集団の間に成立するのであり、女性は婚姻相手としてではなく、交換されるモノのひとつであることを分析した。婚姻とは男性間の女性の交換である。

(5)たとえば『不機嫌な果実』(一九九六)はベストセラーとなり、映画化、ドラマ化された。「夫以外の男とのセックスはどうしてこんなに楽しいのだろうか」という惹句がマスコミの話題をさらった。

(6)セジウィックが近代イギリス文学を分析したことからわかるようにミソジニー、ホモフォビア、ホモソーシャルの概念が有効性をもつのはフリーコリーのいう「セクシュアリティの近代」の社会である。

それらはジェンダー同様、歴史的な構築物である。たとえばロマンチック・ラブ神話の衰退やセクシュアルマイノリティの社会的可視化など、「セクシュアリティの近代」の綻びは随所にみられる。女性を巡る状況も変化した。三〇代独身女性の「負け犬」論争や「四〇代女性」をさす「アラフォー」が流行したことも記憶に新しい。女性の就業率も上昇している。その一方で未婚率は上昇しているが、モテブームや婚活ブームなど異性愛主義による恋愛イデオロギーは強化されているように筆者には感じられる。

(7)林真理子は上野千鶴子との対談で「けっこうフェミニズムを唱える人の側に近いかな」と述べ、上野は「私は林さんと同じメッセージを送ってるかもしれない」と述べた。詳しくは(林・上野、二〇〇一)を参照されたい。